

登山・登攀の記録

北アルプス 獅子岳東尾根～雄山～雄山東尾根下降

日時:2001年11月23日～11月25日

メンバー:CL 中西博己、井田陽介、新谷岳史、中村琢磨、牛田一成(顧問)、鶴飼一博(OB)

概要:冬合宿に向けたトレーニングとして、立山の南にある獅子岳東尾根を登った。暖冬の影響で雪が無く、背丈を越えるハイマツの藪こぎに苦しめられた。獅子岳東尾根にはペイント・赤布の類はまったく見られず、ほとんど登られていないものと思われる。

記録

11月22日

その日のドライブは最悪だった。高速で捕まるのがいやで、制限速度を守っていたら、眠くなってしまった。二回もパーキングで休んでやっと扇沢にたどり着いた。扇沢で伊藤先生と合流のはずだったが、レガシイは見えず、人影はなく、どうしていいかわからず、車の中で仮眠した。

11月23日 晴れ

黒部ダム(8:45)－御山谷(10:15)－尾根上1657
㊦(12:10)－1780 ㊦(13:15)－T.S2000 ㊦
(16:00)

朝起きて、もう一度反則切符をみて、25000円の罰金が現実だと言うことを再認識し、どんよりとなる。「くそっ」と小さくつぶやく。「なんてことだ」アームレストに、そいつをそっとしまい込みつつ大きく息をついた。「やれやれ」。朝の空は——そんなこと忘れちまいなよ、たいした事ではないさ——、とそのすがすがしさと、ぴんと張り詰めた寒さで慰めてくれるようだった。さて、扇沢のバスターミナルに向かった。そこで学術的極右登山隊、見るも語るも怪しい、京都府立大学山岳部の面々が集まった。周りは、ボーダー、スキーヤー(彼らは一刻も早く滑りたくやってくるのだが)ばかりだった。そうでなければ、山を撮りに来た、写真機集団だった。バスを待っている間、パンを咀嚼し、今日のエネルギーを貯える。バスに乗り、向かうは、黒部ダム。何事も無く、こなせたらいいのだが…少し不安だ。

雄山東尾根に向かう、伊藤、堀中パーティと途中

で別れ、獅子岳東尾根に向かった。一度目の渡渉で、シンタニは予想通り、はまってくれた。何度か渡渉し、東尾根の取り付きの手前で休んだ。沢筋に少し登り、対岸に渡るため、はだしになり渡渉した。さすがに冷たい。脳髄まで響く冷たさだ。ここでもシンタニがやってくれるか、と期待されたが、彼は転ばずに、渡った。「うーん期待を裏切ってくれて良かったような悪かったような…」適当なところから尾根に取り付き、ヤブを登り、途中で雪の詰まった小さく緩いルンゼに入った。シンタニ、テンジンはヤブと、「格闘」している。それはちと違うぞ。「軽く受け流す」のだ。軽やかなヤブをこなすのだ。シュタインは、さすが、心得ており、奥義を会得している。しかも、パワーがすごい。さしずめ、静かな高性能エンジンというところであろう。それに比べて、テンジンはというと、次の日明らかになるのであるが、こいつは、ヤブにしばかれたり、引っかかったりするとAV男優もはだしで逃げ出すぐらいの、リアルな、生々しい喘ぎ声を出すのである。「ううっ、ああっ」…聞いているこちらは楽しいのだけど…それでも、ヤブをこなすのが遅いので、哀れになってくる。

まあ、地面には雪がついてはいるんだけど、ヤブはいつも通りで、そんなことお構いなしであった。しばし、高度計とにらめっこが続いた。高度が上がらんなあ…

ようやく、ここぞというところにテントサイトを見つけ、設営。2000m。今日は特に、たいしたこと無かったなあ、明日は、ハイマツを抜けて森林限界、そして主稜線だー、いえーい！コトによると、雄山越え

登山・登攀の記録

できるかな？とまで思っていた。甘かった。うかつだった。

「ハイマツ」、これは今までのハイマツではなかった。低く虐げられ、ひしゃげているというイメージは駆逐された。彼らもまた生き物で、ダイナミックなほどに成長し、極みまで高められたプライドを持って、その生命の全てをその様態において誇示していた。風のあまり強くない2300m－2500mにおいて、彼らの生命の力はいかなくなり、この地において発揮され、その背丈は、われわれのそれを越えるのであった。

その中を、冬装備を担いだ我々がくぐることは、蝶が蜘蛛の糸の間を抜けるのが不可能なように、同じく不可能であるように思われ、また、その上に行くことは、綱渡り師のような、きわめて類まれなるバランス感覚と勘が必要と思われた。というのも、もしバランスを崩し、ハイマツの海へとはいまり込んだならば、そこから抜け出るのに多大な労苦が必要と思われるからだ。いや、軽々しく、ハイマツの上に乗るなんて事は、激重の荷物を背負ったわれわれが選ぶべき選択肢ではない。

ではどうすべきか。

11月 24 日 晴れ

出発 (6:30) -2056m (7:20) - 2351m (13:00)
-2550m (15:10) 獅子岳 T.S (17:00)

朝も早々に起き出し、ささのヤブを漕ぎ出す。しばらくして、ハイマツが出てくる。そう、上述の「ハイマツ」だ。テンジゲンが喘ぎ声を、そのボリュームと頻度を増したのは、この頃であった。不意に現れた禿地でへたり込む。ふと見ると、右手には、ハイマツの先に、ダケカンバの雪面。左を見ると、切れてハイマツが少なく、ガレていて、トラバースでその先の崩壊地から、ちょっとみていけそうだった。よし、いってみるべ。

途中までは順調だった。しかし、崩壊地を通過しようとする、そこは思ったよりも脆く、抜き差しならなくなった。仕方なく、ほぼ垂直のハイマツのやぶこぎを敢行した。涙が出るほどしんどい。進めない。手を放したら、まっさかさま。腕を振り上げ、ハイマ

ツをつかみ、体を上げ、足をねじ込み、からだの前のハイマツを押しつけるか、押し込む。押し戻されそうになるのをこらえながら、必死の思いで、垂直下のハイマツ舞踏は続いてゆくのであった。

苦しくとも軽やかに舞う者、ハイマツにいいように躍らされている者、両者とも、もはや腕は傷だらけ。やっとの思いで、稜線に戻ることでできるルンゼに到着した。快適にそのルンゼを詰めるが、上部は甚だ脆く、落ちるかどうかが試していた石が、落ちてしまった。これはまずかった。落ちそうなら、さわらなければ良かったのだ。ようやくのことで、稜線に戻る。先ほどからゼーゼンゼン進んでいない。あああ。

目の前には100Mほどハイマツがある。くそ真面目にいても、馬鹿を見よう。この世の中でかなりしんどいものの一つであるヤブ・トラバースをして、ダケカンバの斜面にルートをとることにした。

「ほんの少し苦しめばいいのだ、それを我慢すれば雪面だ」

これは正解だった。

「ちくしょう、はじめからこうしておけばよかった。」嘆いても、後の祭り。ようやく、雪と風の支配地域に近づき、ハイマツも、おとなしくなる。そこから、主稜線に出る。ああ、なんて気持ちがいいんだろう！！この雪の感覚(ゲフェール)！たまらん。向かって左手の谷に、人のトレースらしきものがあった。なんと。

どんどん高度を上げる。鶴飼氏にテンジゲンを任せ、獅子岳へ向かう。アイゼンを快適に軋ませ、夕暮間近、来し方の、牛首、いや、獅子岳東尾根を振り返る。なんとまあ、えげつない尾根だったなあ。単調なアップダウンをこなし、獅子岳山頂に出た。ここから下って、雪田でテントを張ろうか、と思ったが、何やらシタニが遅れ気味。ここ山頂でも、張れないことはないので、ここまでとした。竜王岳方面からここまでトレースがついていた。感じからして、一人か二人、ピストンで来たみたいだった。わかんを埋め、支点にして、テントを張った。ハイマツからはあまり取れなかった。やれやれ、明日は、どこまで下れるかなあ？

登山・登攀の記録

11月25日 晴れ

出発(6:30)－鬼岳(7:35)－龍王岳(9:00)－雄山(10:15)－黒部平(14:35)－黒部ダム(15:50)

天気図からしても、今日一日の晴れは約束されたも同然だ。

風もあまり無いし、いい感じだ。さて、やや細いリッジのアップダウンを進む。夏道は、浅いルンゼを下っているが、わざわざそこをたどる必要はないと思った。一段下って、雪田を歩き、鬼岳を見上げる。トレースは、尾根どおしで上がっていた。気持ち悪い思いをして、わざわざ夏道通りトラバースをするのはメリットなしと思って止めた。尾根どおしは、細いが、行けないことはない。頂上直下で、やや傾斜が強くなったが、後続の1回生も、問題なくやってきているので、ほっとした。鬼岳山頂からクライムダウンして、竜王との間のコルに向かった。緩いところを降りてもいいが、転んでも、まっさかさま、ということはないし、せっかくなので、急なところをねらって、クライムダウンした。1回生諸君も慣れてくると、うまいものになった。うーんすごい。竜王のコルからルートを目で追うが、どう見ても、クローラールに目が行ってしまう。

「いってみよ♪」

なんとまあ、ふくらはぎはパンパンになりそうだが、快適なこと！最後、上部はガレていて不安定だったが、そこが一番気を使った。そのまま竜王岳山頂に向かった。ええ感じである。

カリカリの傾斜の強い雪壁にも臆せず、1回生は良く頑張っていると思った。

山頂でシタニが一言、

「夏道って下にありましたよ」

ちがうって、俺もわかってたって。それを分かって、竜王のてっぺんに登ったんだ。

夏道は、ピークを巻いているけど、冬だからこそ、やぶこぎも無く、簡単に登れるんだ。

ええライン、と言って欲しい。竜王を下り、富山大研究所を通過し、一の越しへ。一の越しでは、人がうじゃっついたので、チンタラせず、雄山山頂へ

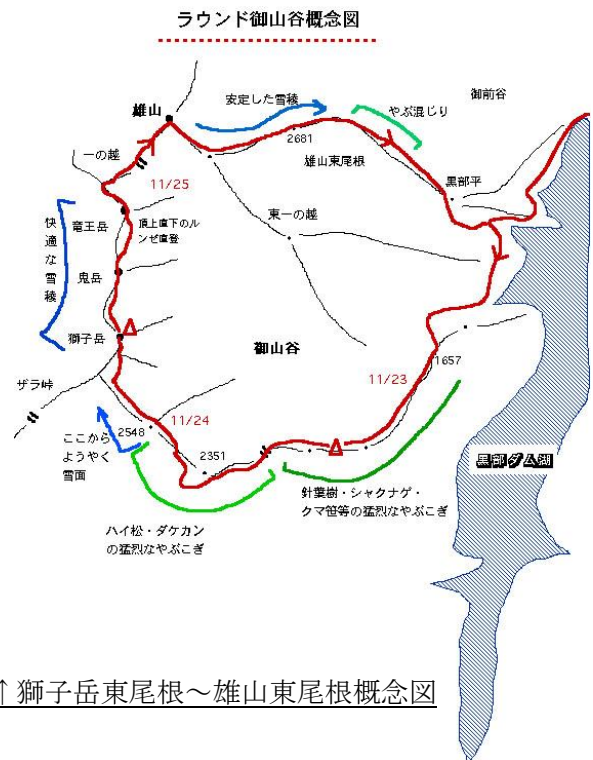
向かった。途中、やたら遅い一隊を抜いて、ピークへ。

快晴だ。白い雄山東尾根は快適そうに見えた。どうやら、伊藤パーティは先に降りたみたいだった。旗竿だけ残っている。しばらくするとやたら寒くなってきたので、雄山東尾根を下降し始めた。10時半。

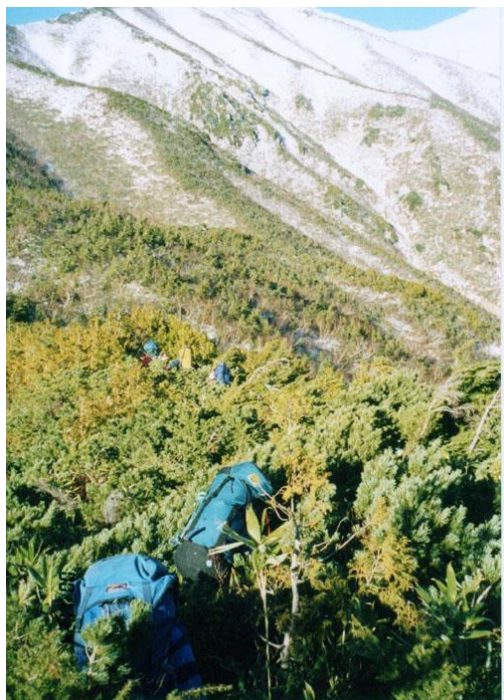
急斜面のクライムダウンが数度あったが、1回生はなかなか、安定感がある。ずーっと見る必要はないと思い、旗竿回収に専念した。東尾根は、やはり長く、2300M付近から、ヤブが出てきた。そこから、黒部平の上の夏道に出るまでは、ちょっといやらしく、ルートファインディングもむずいなあ、という感じであった。黒部平3時前。もしかして、最終のトrolleyに乗れるかも知れん、と先を急いだ。黒部平からダムへの道が一瞬分からなくて、あせった。ダムへの道を踏みしめながら、あのハイマツのやぶこぎはほんの昨日のことだったのか、と思うと不思議でならなかった。かなりしんどく、充実した山行に、満足しながら思った。「これで夏の東信道や黒部別山も可能か？」

その答えは出す必要があるかもしれない。

(記／中西)



登山・登攀の記録



↑ 猛烈な藪こぎ